

第8回作業科学佐藤剛記念講演（2004年11月23日）

時間と場所と作業：私たちの生活のとらえ方を形作るもの Time, Space, and Occupation: Interactions Shaping our Perceptions of Life

Ruth Zemke, OTR, FAOTA
南カリフォルニア大学・名誉教授

伊藤貴代子・村井真由美（介護老人保健施設 愛と結の街）・吉川ひろみ（県立広島大学）監訳

この講演はスレーグル講演を土台としたものであり、本稿も次の文献に基づいて作成した。Zemke R: The 2004 Eleanor Clarke Slagle Lecture: Time, Space, and the Kaleidoscopes of Occupation. Amer J Occup Ther 58 (6), 608-620, 2004.

私たちの日常の作業は時間と空間の中で生じるが、作業を理解する上では伝統的に外的環境の一部として時間と空間をみてきた。作業の「いつ」「どこで」というパターンを説明することができるが、時間や空間と作業の内的経験との関連性は、個人にとっての意味以上のもので、より複雑なパターンを生じさせる。万華鏡の中のガラスの多様な小片のように、作業の多くの要素が相互に関連する。私たちの選択を反映し、常に変化する、日々の作業の複雑なパターンが見出される。健康を維持したり回復するためにもっとも重要な作業の要素と、歴史的に私たちが作業を見てきた中での鏡とレンズは、作業療法におけるパターンを変化させてきている。私たちが自分自身を、私たちの実践をどう見るか、私たちがサービスを提供する相手にとってはどうかというパターンを変化させてきているのである。崇高さと不思議さを生み出す万華鏡のように、私たちは作業療法の科学（science）と技（art）を融合しなければならない。

時間と空間は、宇宙、進化論的なことから人間に至るまで、多くのレベルで研究されている。宇宙の時間と空間は天地万有の起源の物語である。進化論的な時間と空間は、地球上の生存している生き物のものである。人間の時間と空間は人間の生活の過程や活動の中で理解されている（Tuan, 1977, pp.132-134）。それぞれ、私たちの作業を見ることができるところを通して、異なった万華鏡の鏡の一式を用いている。それぞれ異なった図柄に終わるが、全てそれぞれのデザインにとって作業の基礎となる要素に基づいている。

宇宙の時間と空間

宇宙レベルでの時間と空間は、人類の基本的な論点を織り交ぜた全ての文化の中で、Paul Gauguin が 1897 年に描いた「私たちはどこから来たのか？私たちは何か？私たちはどこに向かうのか？」ということに代表されるように哲学者や神学者により産み出された。私たちの器官、アイデンティティ、運命、宇宙と結びついた人間の概念、それぞれを誕生、生、死が描かれた絵がある。人間は時間と空間を通して、世代を通して、動物の祖先、早期の生物体の形態を通して、宇宙の物

質の要素を通して、物質に対して変えられるエネルギー、つまり分子と波動の両方を通して私たちの生命までさかのぼることができる。

Einstein（アインシュタイン）の宇宙論は、始まりが時間、空間、物質、エネルギーの調和であることを提唱している：類稀なことに、微小な空間点、微小な瞬間は全て；全てゼロの大きさであった。約 150 億年前は、宇宙、空間、物質、エネルギーは、自然に動的なものとなり、時間と共に拡大する、「潮の流木のように運ばれた物質」である空間の中の「ビッグバン」という、焼けるような熱い火の玉の中で外へ破裂した（Veneziano, 2004, p.56）。火の玉が拡大し、冷めたとき、小さな亜原子粒子が原子に合体した。一般的な相対性理論の方程式である Einstein の理論は、時間と空間の両者を含んだ 4 次元の幾何学に基づいていた。重力は、物質に接近して時間-空間の連続体の中で湾曲するか、曲がった。原子はこのように銀河系を形成するために重力の活動の下で併合された。いくつかの星は惑星のシステムを発現させ、これらの惑星のいくつかは（私たちが知っている少なくとも一つは）生命を発現させた。

進化論的な時間と空間

進化論的な時間を渡り、環境に適応していく中で、動物の種は時間と空間を越えて種の個数の変動から自然淘汰を通じた適応に依存している。Einstein の精神発達理論 (1987, 1989, 1992) は、個々の脳の適応は、選択過程を通して、この場合、脳の神経細胞の個数の多様性から選ばれたことを通して生じたことをも提唱している。彼は、個体の概念の瞬間から、時間と空間は分割、移動、組織化した時、細胞集団の形成を決定すると指摘した。私たちの個体は、発達している細胞、胎芽、胎児の時間的、空間的な歴史によって決定されている。脳細胞の初期のレパートリーあるいは基礎グループは、環境的な時間と空間と個々の相互作用を通して形成される。この形成は、神経系シナプスの形成と増強を通して生じる。連続した刺激は、連続的に組織化され、私たちの最初の時間と空間の認識となる変化の認識を生み出すのは、神経細胞の異なったパターンを生み出す場所の中にある。これらの神経細胞の連結は、私たちを取り巻く世界の経験の「ローカルマップ」と Edelman が呼んでいるものを形作っている。これらのローカルマップは、環境と人間が作業的にしっかりと結びついている感覚、つまり環境が時間と空間と共に密接に結びついていることから来る刺激の一つであり、共に結びついている神経細胞の集団である。これらのローカルマップの集団としての私たちの経験の事実の神経細胞の地図は、次第に全体的な地図を組織化し、形作っていく。生きている生物の内外の現実の地図は、自己とそうでないものを認識させ始める。それは、環境の中での行動パターンと環境のパターン、時間と空間の中のパターンを認識することでもある。

Paul MacLean (前 NIMH 脳と行動研究室室長) は、三つの、あるいは三部門としての人間の脳のモデルを發展させた (Jacob, 2003; MacClean, 1978)。三つの脳は、古代の爬虫類の脳 (脳幹)、古い哺乳類の情動脳 (大脳辺縁体)、「それぞれの最上位」として発達した高次哺乳類の大脳新皮質という進化論的モデルである。その解剖学的構造の理解を助けるために、Orstein と Thompson (1984) は私たちにまとまりがなく、何年もかけて付け足しがされたような家を想像するよう求めた。それとは対照的に、Caine と Caine (1991) は、三つの人間の脳の複雑な機能を理解するために、一緒に住み、一緒に働いている 3 人の家族と考えることを提案した。私は、3 人の姉妹の脳家族として考えることが好きだ。

一番上の姉、脳幹のベティは維持の担当である：食

べ物を提供し、廃棄物を捨て、全般の安全保障に仕え、住む場所を快適にする。彼女は無意識のうちに機能し、秩序と安全保障を愛し、変化と新奇さには抵抗する。彼女が性に仕えるときは、繁殖のためである。彼女は決して他者と自分の住む家とを分けて考えることはない。彼女の世界の中では、時間は今で、場所はここなのである。彼女は言語を使わず、とても静かである。

ベティ (と初期の人間) は、直接的に世界に没頭していたので、自分自身と外部の区別がほとんどないために、客観的実在はありそうもなかった (Jacob, 2003, p. 13)。この区別は、Edelman が考える包括的な地図、意識の始まり (非自己と自己の区別、自己と非自己の境界の発達、内と外、概念の発達、抽象概念、自己の世界内外の時間と空間の知識の区分) によって作られた。

脳家族の 2 番目の姉は、「過敏な新世代」タイプの女性である。大脳辺縁系のルーズ (通称ルー) は、深く情緒的で、ベティが知らない様々な顔や体の表現で彼女の感情を分かち合う。ルーは提携、儀式、祝賀を大切にす。彼女は、時間と空間、過去の経験から現在の場所に感情をもたらすことに関係した情緒を持っている。ルーは、競争と協力の間を揺らいでいる。彼女の性に関する焦点は、ロマンチックな感情、あるいは時折の拒絶の痛みである。彼女は集団から遠ざけられること、あるいは集団の中の成員や大切な「他者」の情緒的な満足から切り離されることを恐れている。ルーにとって、時間は過去の感情と将来の不安を意味し、空間は彼女が気にかけている人や物に近づくか、遠ざかることを意味している。

最も若く、大柄な妹は大脳新皮質のネルである。彼女は脳家族の誇りであり、喜びである。彼女は言語と技で創造的な技能を持っており、さらに複雑な科学的分析と高次の抽象的思考が可能である。ネルは意味ある作業、挑戦、新奇さ、刺激を求めている。彼女は、退屈、作業剥奪、停滞を嘆く。彼女の姉たちは時折、彼女が全く無意識であること、内省的でないこと、あるいは少なくとも彼女が自分自身についてたくさん語りすぎないことを願っている。それは、外的世界の感覚や情緒的な知覚とは違うように、大脳新皮質のネルが内的、外的現実と時間と空間の自分自身の解釈を作り上げてしまうのである。彼女は、家族の歴史、過去、彼女たちが存在した場所の軌跡を描くが、多くは激しく未来と家族の家屋敷が元の場所に戻る可能性に焦点を当てている。彼女は他者と決定を分かち合うけれども、未来を予想し、計画を立てることができ、脳家族

みんなで計画を実行することができる。姉たちはネルができることについて誇りに思っている一方で、ルーの状況に対応する情緒的な統制や、ベティを自由にさせることに対して「シフトダウン」する時がある。それは、円滑さに欠け、攻撃的な行動が伴うからである。ネルが決まり切った、あるいは習慣的な作業に退屈し、意味ある作業を奪われる時、ルーが不安やストレスを感じる時、ベティの警報器が鳴り、安全が脅かされているということを他者に知らせることがある！

大脳新皮質のネルが生み出すフィルターにとってとても自然である抽象概念は、感覚知覚のための概念の代用であり、このような直接経験の欠如が彼女をいくらか現実世界との接触から外すのである。西洋文化の人間は、ネルのように、自然淘汰の一部ではなく、優位種として自分自身を見るようになった。私たちは、自己を全ての他者と分けて考え、参加するというよりは自然世界を観察し始めたのだ。私たちは、自然と他者という物事を、私たちに関係がある有用さとか目的という点で見始めたのだ。私たちは外の世界としっかり結びついている時に実際の経験を閉め出すことができる。運転中や仕事中、日中イライラして日没を見損うかもしれない。自分がしていることから自分を解放することができる；その瞬間、その場所、その作業を経験し、そこにいることから自分を解放する（Jacob, 2003, p.14, Langer, 1989）。

作業は、多くの方法で定義され、述べられている。それは、作業の外的に観察できる性質を強調し、人が毎日する普通でなじみのあること（American Occupational Therapy Association [AOTA], 1995）、活動をするという経験（Pierce, 2001, 2003）を強調したものである。人間の時間と空間は、2つの側面を持っている。時計時間や地理的位置のような外的あるいは位置的なものと、「生きられた空間」と言われる経験的な側面である（Parkes & Thrift, 1980）。この経験的な側面は、主観的であり、「経験者が生き、動き、意味を探す」というものである（Buttimer, 1976, p. 282）。私たちが、作業のこの経験的な定義を含めたとき、また時間と空間の経験的な側面を考慮することを私たちに思い出させる。

時間／時間性

伝統的に私たちは、宇宙の感覚の中での時間の考えを持っている。明確でない、あるいは無限の範囲で、出来事が起こった、起こっている、これから起こるだろうと考える。存在する、あるいは存在するであろう

全ての瞬間でそう考える。私たちは時間の外的な位置についての次元を学んでいる。それは、時計時間、何かが起こった、起こっている、起こるであろうという時間；出来事の継続時間と間隔である。

Christiansen (1996) は、私たちの領域、時間との関係、時間使用を含めたものの中で伝統的な作業バランスの概念について概観した。国際的な時間使用の研究の結果、多くの国の人がどのように時間を費やしているかという作業パターン（例：Robinson, 1997; Szalai, 1977; Szalai & Andrews, 1980）が報告され、データ収集と分析のための適切な研究方法について論じられていた（Pentland, Harvey, Lawton, & McColl, 1999）。これら全ては、作業の測定として時間の位置的な見方を用いている。この傾向の中で、Minato & Zemke (2004) は、日本の地域に住む統合失調症の人々の時間使用について、日常の作業パターンのストレスとストレスに関連した作業選択のストラテジーを明らかにするために調査を行った。参加者は短期間のストラテジーとしてストレスを軽減する作業に時間を費やすけれども、ストレスへの反応を統制する長期間の技能を発達させ、練習をするために彼らはまたデイケアプログラム、作業所、パートタイムの仕事といった仕事の活動というストレスのある作業参加への時間使用を選んでいることがわかった。Erlandsson, Rognvaldsson, & Eklund (2004) は、「昨日の日記」を時間－作業の図に書き替え、図によって記したパターンの複雑さを分析し、時間の中の作業パターンをより最新の方法で研究した。彼らは、作業の意味や価値、健康との関係のような他の作業の性質という点から、作業パターンを説明するプロセスの更なる発展の必要性に言及している（Erlandsson, Rognvaldsson, & Eklund, p. 12）。

私が今日明らかにしようと思っている作業の概念に恐らくよく合っているのは、結びつきの経験と時間性の概念だろう。時間性の概念とは、時間の経験、時間の知覚、時間の意味である。私たちは、作業の時間的な側面に馴染みがあり、それは「リズム（作業内の課題のパターン）、テンポ（作業の〔過程の〕割合、または速度）、同時性（他の参加者と共に）、持続時間... 順序（課題の順番）」であり、私たちの日常の作業のパターンに役立つものである（Larson & Zemke; Zemke & Clark, 1996, P.92）。例えば、作業のいくつかは繰り返し連続されなければならない、必要とされるであろうペースや時間量を決められるものがある。子供の世話のような作業は、子供のテンポが、大人のスケジュールより重要であるかも知れない（Krieger, 1996; Larson,

2000; Larson & Zemke, 2004).

時間の人間の認識は、脳家族の特徴の混合を示す。私たちは、「捉え方と連続性、同期性各感覚システム内の継続期間を認識し、これらの知覚パターンを統合し、この情報を過去と未来に関連した明確な現在の感覚を与えるために組織化し、社会文化的な環境の中でこれらの時間の側面を組織化」しなければならない (Blanche & Pahrham, 2001, p. 188)。幼少期の意識の始まりは、脳幹のベティに似ていて、空腹、喉の渇き、疲労、寒さという不快の中で、時間の満足と快が得られた期間がある。不快と快に対する内的、外的な反応が同時に起こることで、大脳辺縁系のルーの基本的情緒レパートリーが形成される。ルーは、複雑さの増大を示すが、周囲のものによって調整された時間の意味に対して強く反応する。大脳新皮質のネルは、家族の時計の読み手であり、彼女のカレンダーとスケジュールを使って秒、分、時間、年の等間隔の単位と想像される時間界の合理的な概念を認知的に知覚する。彼女たちはみんなで生涯を通して作業と結びつく中での渡した時間の経験を形作る。Cottle と Klineberg (1974) は、私たちの時間の経験である時間性の生涯発達について述べた。

人々は、作業との結びつき (occupational engagement) によって形作られた多様な時間性を経験している。私たちの作業が影響している私たちの時間の見方はどのようなものであるか？私たちは異なった作業において、異なった速度で時間が動くという知覚をしている。時々、私たちは作業経験それ自身に焦点を当てるような挑戦的な活動をしているために、時間が過ぎるのを完全に忘れてしまうことがある。

Flaherty の研究 (1999) では、時間的圧縮、時間的延長、同期という3つの時間性を生み出すかもしれない基礎について論じている。時間的圧縮は、時計の時間が示すよりも時間の進み方 (進み) が少ないことを経験するとき起こる。時々、私たちは、「楽しいときは時間が飛んでいく」とよく言い、あたかも時計の動きが速くなったようである。反対に、時間的延長は、時計の時間が示すよりももっと時間がかかっていると感じる時に生じる。それは退屈な時に時間が間延びしていると感じる。まるで時計が遅くなったようだ。Flaherty は、同期についても明らかにした。経験した時間と時計の時間が一致して認識されることである。恐らく私たちの日の多くは、この経験を生み出す作業との結びつきを必然的に伴う。特にどこにでも時計があり、ほとんど全ての人の腕に時計があるこの社会で

はそうである。

他の作業的時間性についても述べられている。Csikszentmihalyi (1988, 1990) は、私たちをフローという経験に導く特定の作業の質について述べている。フローは、時間が永遠に続くという感覚を含んだ作業との結びつきに強烈に焦点を当てたものである。混乱した時間性の他の経験として時間的断絶を含む。急性の、あるいは慢性の病気や障害の発症のような人生を変える出来事の中の時間の歪みである。あたかも時間の「生地」が出来事によって引き裂かれたようであり、その修復は非常にゆるやかで、満足する作業への復帰の中である人のゆるやかな掛かり合いとして馴染みのある時間性に戻る過程がゆっくりとなる。一時ではあるが、激しい情緒的、認知的混乱は、強烈な衝撃の極度の環境の下で起こりうる。この極度の時間的経験の例は、次の例で見られる。去る5月の記念日プログラムで、私の父である第二次世界大戦の米軍空軍パイロットの最高勝利大佐大尉が、遠く過ぎた時間と場所での自身の経験の意味について話すために招待された。彼の回想の中で、以前の空中戦の瞬間を思い出し、彼にとっては時間が止まった。

私たちのほとんどはこのような上記のような劇的な時間性の混乱を経験してはいないが、しかし私たちの多くが頻繁に、時間的圧縮、時間的延長、同期、そして時々フローを経験している。Larson は、作業経験についての質問を行い、e-mail のシステム経由で回答した米国の中西部と西部の35名の作業療法学生と共に経験サンプル法 (Experience Sampling Methods: ESM) を用いて、私が作業時間性として言及している、作業に参加している間の時間の経験について研究した (Larson, 未出版データ)。回答者はある一瞬の作業、場所、社会的環境に名前を付け、新奇さ、複雑さ、作業に用いる技能などの質問に答えた。情緒的、知的な参加を含んだ参加について、自己と作業への焦点の当て方、同様に作業経験の時間性への知覚についても回答した。Larson は、構造的モデリング (Structuring Modeling) 分析を用いて、新奇さ、複雑さ、個人の技能の使用という作業の特徴は、参加の予測要因であり、それはつまり時間性を予測するものであることを見出した。動的な時間の作業 (Dynamic Occupations in Time: DOiT) モデル (Larson, 2004) は、文献とデータの結果から予測された複雑な関係を例証した。

Larson の輪郭頻度分析 (Configural Frequency Analysis) (Bergman, 1998; Von Eye, Spiel, & Wood, 1996) を用いた更なるデータの検証は、要因のパターン (新

奇さ、複雑さ、情緒的、知的参加、自己への注意、作業への注意)とそれらに付随しているかもしれない要因パターンの高い、低い、と時間性を見出す試みが行われた。この見解は、統計的に期待されたものより、より頻繁に起こる特徴のパターンの存在を支持したが、また6つの複合した「タイプ」またはパターンがあり、それは知覚された時間性の範囲に関係していた。参加者への開放型の質問に対する分析に基づいて、更なる作業的、個人的特徴が、作業の楽しみ、作業遂行の満足、遂行ストレス、私たちが目標達成にいかになづいているか、のような要素を含んだ時間性をよく予測することが含まれるべきだ、と提唱された。

米国社会における時間への圧力の感情に応じて、私たちは自分の目標の優先順位をつけることを奨励され (Covey, 1989)、しなければならないことを削減していくよう試みる。経済的によくすることは、この国の人々は、時間の欠乏の知覚に影響を受けている。つまり、私たちは利用できる時間の中ですること(作業)がたくさんあるのだ。世界の他の国と比べると米国は、お金は裕福だが、時間は貧しいように見えるのか? 1日同じ24時間という制限を休息として持てば、私たちは時間的に豊かになるのか? このディレンマを解決する私たちの試みは、時間を深めることを含む (Robinson & Godbey, 1997)。多重性のある文化 (Hall, 1983) の中で、いろいろな作業が同じ時間枠の中で遂行される。この複数の課題は、私たちが抱え込んだ作業 (enfolded occupations) として言及したことである (Bateson, 1996; Larson & Zemke, 2004; Zemke & Clark, 1996, p. 91)。Primeau は、自動車旅行の中で一つの目的以上の組み合わせについて「旅行の連鎖 (trip-chaining)」と述べた (1996, p. 120)。運転している不動産仲介業者は、客と携帯電話で会話をしながら、ノートパソコンで他の客の不動産のためにインターネットを見ている。それは3人目の客の「売り家」に移動しながら行われているのである。私たちは「空間を深めている」のかもしれない。同時に一つの場所以上で起こりそうにもないことが、科学技術の発展により起こっている。

空間／場所

18世紀と19世紀は、哲学的に時間中心主義 (temporocentrism) の時代である一方 (Casey, 1997, p. x), 空間はたいいて時間上の特定の点において研究され、20世紀の哲学は、人間の生活の空間と場所の基礎的な質を強調し、同様に空間と時間を織り交ぜていた。物事が起こりうる無限の大きさとして宇宙の時間を私

たちが考えるなら、存在している、あるいは存在するのである。全ての瞬間は、そのとき類似した宇宙の見える範囲での空間を、全ての物質的な物が存在する全ての方向に拡張した広がりとして定義している。時間の位置的な範囲が、何か起こる瞬間であるなら、継続期間あるいは物事の間では、そのとき空間の類似した広がり物が物事の位置づけであり、範囲あるいは物事の間である。空間についての私たちの作業的な関心は、作業をする中での私たち人間の位置や、作業をすることを通して動きに関係している。

私たちは空間的な次元と同じく、時間性についても具体的に形作られている。私たちは拡大した宇宙における私たちの惑星の太陽の周りの回転、カリフォルニアの私の家、私たちの足の下での地震という地球の動きという空間を通過して動いている。私たちはまた行動し、空間の中で動き、それは私たちの食べ物や老廃物である身体、血液、空気、化学物質の中で行われる事柄である。私たちの内的、外的動きは、私たちの体の中で、あるいは私たち自身と他者の体の中で、私たちの惑星と他の天文学的な本体の間で、私たちの宇宙の事柄の全ての要素の間での関係を変化させる。これらの変化する関係は、時間の知覚と時間性の経験を生み出す。同様に、空間の経験的な性質は、私たちの作業である「作業—空間性 (occupatio-spaciality)」によって形作られた私たちの場所の認識、場所の知覚、場所の意味であるかもしれない。

私たちは、(具体的に表現された)「存在 (beings)」であり、「行為者 (doers)」(行動し、動く)であり、「なっていく存在 (becoming)」であるので、私たちは時空の生き物であり、空間と時間の中に置かれ、両者の中で経験する。私たちの生涯がタペストリーなら、そのときそのデザインは私たちの位置、空間や時間によって形作られ、縦糸、横糸は、私たちの作業のパターンを通して織られている。パターンは配列または構成部分の配列といったデザインである。このケースでは、作業パターンは時間と空間の中の私たちの作業のデザインであり、時間的、空間的場所や経験の配列である。

空間、時間の段階的な意識の発達は、私たち自身の身体と共に始まる。Merleau-Ponty は、「私から遠いところにある空間は、ばらばらでまとまりを持たない。もし私のこの体がなかったら、空間なんてどこにもない」(1965/2002, p. 112)と述べた。Henderson は、作業療法士と作業科学者に、身体空間と空間的な環境との相互作用 (私たちの身体と身体の表面の知覚、感覚器官 <proprioception> または動作器官 <kinesthesia>), 空

間の把握（私たちの手の届く範囲，私たちの上肢の機能的な動きによって知る），末梢の空間（私たちが私たちの体を動かすことを通したリーチの範囲を超えた範囲）に注意を向けさせた（Blanche & Parham, 2001; Henderson, 1996）．認識された空間は，脳幹のベティの捕食や捕獲の区別からの感覚情報と，馴染みのあるアフターシェービングローションの一吹きによって刺激される大脳辺縁系ルーの感情を通して，大脳新皮質ネルの仕事のための移動地図やサイバースペースの認知的構成まで，脳の多様な出所を処理することを要求する．しかし，時間性の経験が物理的な宇宙時間とは違うと同様に，物理的空間も経験的なそれとは異なっている．

どのように「空間」という物理的なものが，意味を持った存在である「場所」になるのか？家やアパート，城や掘って立て小屋の何が，「家」にするのか？場所は，物理的にも象徴的にも作られる．Relph (1976) の場所の現象学的な古典的発表の中で，場所を空間とは違った物にした場所の主観的な経験の根本的要素を明らかにしている．場所は，共通性はあるが，必ずしも同じ場所であることを必要としないけれども，認識できる質，自然の，あるいは組み立てられた外観，または人間の活動や価値を反映しているに違いない．私たちの市のスタジアムは，たやすく認識できる場所である．その根本的要素は，「場所は行為と意思の中心であり，私たちの存在の意味ある出来事を経験する所の‘焦点’だ」ということである（Norberg-Schulz, Relph による引用, 1976, P. 42）．「空間は，定義と意味を獲得する時に場所が変わる」（Tuan, 1977, p.136）．場所は，そこで起こり，私たちにとって意味が生じる作業相互作用のパターンから発達する．もちろん「いくつかの出来事や行動は，ある特定の状況の中でのみ意味をもつ」（Relph, 1976, p.42）．どんな作業が場所または空間の性質を規定するか？どこが「聖なる」場所（教会，寺，神社，「緑の大聖堂」）か？公の場所に対する私的な場所とは何か？

場所の付属物は，場所に人を繋ぎとめる物である．私たちは，そこにある作業過去とそこにある作業可能性の知覚に基づいて，場所とのつながりを感じる（Altman & Low, 1992）．「... 場所は個人的な重要性を持ち，重要性は，時間を場所の中で，あるいは場所と共に費やすことを通して確立した... 個人的な経験，直接あるいは代理のどちらかで，意味が加わるよう人を導き... 重要な人生の出来事，鍵となる発達テーマ，あるいは特有の環境とのアイデンティティのプロセス

とをつなぐ... 場所の付属物は，静的状態ではなく，生涯を通して連続するプロセスである」（Rubenstein & Parmalee, 1992, pp. 142-143）．「場所にとっての付属物を形成するために時間がかかる一方，単なる持続期間以上に，経験の質と強度が重要である（Tuan, 1988, p. 198）．

Rowles (1991) の研究結果から，小さな町の高齢者の研究の中で場所の質，強度，継続時間の重要性が説明され，場所は自己の構成要素の一つとなっていた．同地域での長年の生活の中で，空間的な環境は，意味のある人生経験の積み重ねを伴って，意味の歴史的時間の深さを発達させた．彼らの個人史を結びつけ，自己アイデンティティの一部となった．私が自分自身を「米国人，ウイスコンシンから中年の時に移住したカルフォルニア人」と表現する時，私の時間的な歴史や空間的な地理を詳しく語らないが，私自身について何かを言っていると信じている．

場所を作ることは，場所を創造し，維持する行動である（例，家事）．人間作業は，しばしば他者との共同である．Hasselkus (1999) は，治療的な作業場所を作り，作業をすることによって定義されたセラピストとクライアント間の親交と関係の経験という点において，場所作りという作業療法士独特の行動を定義した．時間を費やす治療的な場所を作り維持する行動は，最初に信頼関係と状況を理解を発展させ，それから治療的作業と結びつくことを行い，最終的にセラピーによってもたらされた何らかのよい状態に到達する．

時間と空間，時間性と場所

「私たちは動くことができるので，空間という感覚をもち，生物学的存在として緊張と緩和の状態を繰り返すので時間の感覚をもつ... 手足を伸ばす時，空間を経験すると同時に時間を経験する．物理的拘束状態から自由になる範囲としての空間と，緩和状態から次に来る緊張までの間隔としての時間（Tuan, 1977, p. 118）... 歩調（pace）は，右足から左足までの間隔として見ることができるだけでなく，筋においても感じるところがある．歩調（歩）とはどのようなものか... 時間との関連は？歩調は時間の単位であり，努力と緩和，緊張とリラックスの生物学的アーキとして感じられる．100 歩は，私たちがよく知っている生物学的リズムの 100 単位なのである（pp. 129-130）．」

Hall (1983) は，時間と空間の研究が「人類を宇宙に連れ出し，原子の中心に落とし込み，物理世界の本質に関する理論の基礎がここにあることを導いた

(Hall, 1983, p. 203)」と書いた。空間と時間は、私たちが文化と呼ぶパターンの組み合わせの重要な要素を構成している。時間は語り、空間は話す。私たちの沈黙の文化的ボディランゲージの一部のように (Hall, 1959/1981)。空間と時間は、他者の注意を引く (Bachelder, 1964)。他者は文化の中で個人による時間と空間の経験を通して、時間と空間の性質を定義する。

Rowles (2003) は、時間と空間の「経験」には、空間や時間やその両方の離れた環境における代理的参加といった場合があることを私たちに気付かせた。たとえば、古い写真アルバムのページをめくったり、過去の家族写真やホームビデオを見たりして、思い出す時に、時間的、空間的な移動を経験するかもしれない。

(確かに私は、Royeen 先生が私たちに示した私のスライドを見た時に、一瞬そこに行ってしまった!) 文献を読んだり、映画を見たり、ビデオゲームをしたり、インターネットサーフィンをしている間、現在の場所から地理的に別の場所へ飛んでいっている経験をする。

時間と空間は、作業を制限したり、可能にしたりする。現実の世界では、時間-空間プリズム (Dear, 1996) は、どこで、いつ、どんなふうに、どの作業を私たちが行うかを決定する。作業の間を私たちが行ったり来たりする時に、距離を制限する空間を巡って私たちが動く時に、時間がかかる。特定の活動が、特定の時間と場所において、作業を制約したり、可能にしたりする。私たちは作業に関わる時間と場所がどの程度かということに依存している。それは、私たちが自分の作業を通して自分で「あること」と、自分のことを「すること」が許される時間と空間に依存しているということである。これは、私たちの活動のための時間的および空間的作業アフォーダンスが提供されているということでもある。まるで表面や道具の物理的アフォーダンスと同じように。場所は「行動の設定」となり (Barker, 1968)、そこで個人や周囲が、特定の行動の状態、場所の安定性から生じるシステムを共に創造する。場所は、行動のタイプ、頻度、持続時間、スタイルに影響を与え、作業行動を通してライフスタイルや安寧に影響を与える (Hamilton, 2004)。発達の時間における位置は、作業を可能化するが制約もする。どの年代においても「年齢相応に」というフレーズで制約が加えられる場合、自分自身の健康よりも他者の利益のためということがある。

人生は作業的地平線、あるいは時空感世界の私たちの視野の境界の継続的発達である。Blanche と Parham (2001) は例を示している。たとえば、乳児の作業の

組織化の始まりは、自分自身の「現在の身体空間 (Body Space in the Present)」の範囲内で起こる (p.191) 乳児にとって、この範囲内での共作業 (co-occupations) は、おっぱいを飲んだり、世話をしてくれる人に抱きついたりすることである。成人は同じ範囲内で、瞑想したり、マッサージを受けたりといった作業をするかもしれない。別の時空感的範囲の作業には、身近な時間でのリーチ空間の場合や、Hall (1966, 1983) がパーソナル空間と呼ぶものの中での相互交流があり、数分から数時間の時間枠で生じる。玩具を手でいじったり口にくわえたりという乳児の作業 (Pierce, 1997) と、コンピュータのキーボードを叩くという成人の作業が、これに含まれる。身近な空間と時間を通しての移動

(Moving Through Proximal Space and Time) と呼ばれる時空感的範囲では、ダンスをする、サッカーをする、混雑した公共の場で間をぬって移動するなどの作業の例がある。範囲がさらに広がれば、延長された時間における認知的空間を通しての移動がおり、「活動を日常の中に作業の流れとしてまとめあげていく (Blanche & Parham, 2001, p. 193)」ように、人は時間と空間を組織化する。Blanche らが提案する作業の時間的空間的組織化の更なる範囲は、離れた時間での行動のイメージだ (p. 193)。Blanche らは、行為は「組織化のプロセスであり、行動の総合的組織化と同様に運動コントロールにおいて明確に示される」と述べている (p.183)。「この基本的な時空感的組織化のメカニズムの障害 (発達の行為障害や成人の失行など) は、生涯を通して示される (p.183)」。作業療法士の役割は、身近な空間や時間における単純な運動行動の組織化を強調するだけでなく、クライアントが「より抽象的で複雑な時空感的範囲 (p.198)」に渡り、作業での空間と時間を組織化するのを助ける治療アプローチを考えることである。

Rowles (1993, 2003) の研究は、私たちのよく馴染んでいる道に沿って、日常生活を通して移動する時の毎日の活動における作業の時空間的範囲を反映している。Rowles の研究でわかったリズムは、時間と空間にあり、もちろんルーチンの作業の中にある。あるパターンは、私たちの家とそこにある物に対する身体の気づきの発達である。馴染みのある場所で、馴染みのある物を何年間も使う中で作業が繰り返されると、年若いからは無意識のレベルで空間を操作できるようになり、加齢による感覚変化が起こっても適応し続けることを助けることになる。家より広い環境で身体の気づきがあることは、慣れたダンスをするように、時間

的にも空間的にも社会的にもうまく調和した状態で、人や場所と共に地域参加の習慣的作業パターンの一部となる。

私たちは、時間と空間を融合させ、時間を「長さ」、あるいは量とさえ考える（大幅にはみ出した）。そして空間は時間で測定される。現代生活では、駐車スペースを探すのにずいぶん行った（時間を表す空間の言葉）、次の予約はずっと向こうだ（時間を表す空間の言葉）と言う。Tuan（1998）は、「距離を言うのに時間を使って説明するというのは、時間の単位が努力の感覚を明確に示すという事実である。距離についての質問への回答は、目標を達成するためにどれほどの努力が必要だったか（必要なエネルギー源は何か）を語ることが役立つ」と説明している（Tuan, p. 128）。

作業との結び付きには注意が必要であり、それは筋のエネルギーや作業の選択が、限定された注意によって制限されるのと同様である。限定された注意のエネルギーは、人生を通しての作業の最善の選択をし、発達をサポートする上で重要である（Csikszentmihalyi, 1974, 1990; Csikszentmihalyi & Csikszentmihalyi, 1988; Csikszentmihalyi & Larson, 1984）。

Csikszentmihalyiは、時空間の調和の感覚をもたらし、そこで人の多様な活動と一緒に融合されてフロー経験、つまり意味のある生活を産出する状態を生み出すような、目的的で動因となる作業的生活を推奨している。私たちの生活で、この意味のレベルに達するのは難しいし、青年期は特に、自分の発達のための理想的な作業を見つけることが困難な時期のようだ。青年期はフローを経験しないことがしばしばあり、作業の技能と挑戦感が平均以上ではあるが、うまく合わないのだ。その代わりに、青年期には低い技能と挑戦感の中での無気力（apathy）や退屈を経験する（Farnworth, 2000）。この例は私の最近の研究でも見られる（Zemke, 2000）。Qu（2003）が、ミネアポリスでのアメリカ作業療法協会（AOTA）学会で発表した若い青年の喫煙の作業経験の質を調べた研究である（Qu, Zemke, Chu, & Sun, 2004）。

ロサンジェルス地域の100名の生徒にESMという研究方法を使って調べた。12歳の中学生に、「ビー」と音を出す小型機器を3000以上使って作業経験を報告してもらった。対象者の43%が喫煙者または喫煙経験者であり、通常10代の50~60%は喫煙しているという報告より少し低かった。一日のいつ喫煙するかについては、学校の休み時間、放課後、午後の遅い時間、夕方の早い時間が多く、喫煙場所は私たちも記憶のある学

校の裏庭の角、郊外の道、寝室で一人で、が多かった。喫煙に加わる作業は、受け身的に「ただ考えている」、テレビ、音楽を聴く、だった。彼らの喫煙中の経験は、CsikszentmihalyiとLarson（1984）がエントロピーあるいは無秩序の認知状態と呼んだ無気力の類であり、平均的感情レベルが低く、活動性も低いレベルで、認知的効率性やモチベーションや自己の感覚も低い。もっと興味深かったのは、喫煙の前、最中、後の経験のパターンである。喫煙の前に「ビー」と鳴った時（測定時）に、経験のほとんどの測定項目への反応は平均以下であった。28項目中22項目に、その傾向があり、気分は低く沈み、喫煙中よりも低かった。しかし、喫煙後に「ビー」と鳴った時には高かった。これは、若い人たちが生活経験を改善させるために喫煙を用いているという適応戦略なのかもしれない。以前はよくなったとしても、だんだん悪くしていくようなものであるにもかかわらず、喫煙していない生徒も、多様な作業を行った後に改善がみられたと共に、時折無気力という喫煙者と類似のパターンがみられた。この結果が示唆するのは、若年層へのライフスタイル再構築プログラムを発展させたらどうかということである。このプログラムは、自分の日常経験を改善させるための健康的な作業戦略を見つけ選んでいくことを、支援するものである。

時間、空間、作業：家と仕事

「人が能動的に計画する際に時間と空間が方向づけられる。計画は目標をもつ。目標は空間的な言葉であり、時間的な言葉でもある... 目的的活動において空間と時間は能動的自己に向かって行く...」（Tuan, 1977, p. 128）。

このような目的活動の例を、いくつか簡単にみていこう。家と職場で行われる作業を、時間と空間の軸でみていく。成人のアメリカ人にとって、仕事は自分を示すものである。仕事の機会がわずかしかないか、全くないアメリカ人でさえそうであり、無職であれば自分の価値を低く感じてしまう（Wilson, 1998）。Ehrenrieck（2001）は、低賃金の労働者という役割を「秘かに」行っていることに、ほとんどの同僚が騙されなかったと思った。しかしその後、みんなは彼女がウェイトレス、清掃員、老人施設の助手、小売店の事務をしていることを、実は知っていたと気づいた。その手の人のように彼女が振舞っていたからではなく、彼女がそういう人だったからなのである。少なくともその時その場所においては、BambergerとDavidson（1998）

は、南部の家具工場であるホワイト家具社の閉鎖が、時空間的活動—仕事を失った労働者へ与えた影響を報告した。閉鎖まで長年工場にいた肉体労働者たちは留まることを選んだ。それは彼らにとってそれがキャリアであり、人生であり、単なる仕事ではなかったからである。こうした人々はよく死の比喻を使って、職場と仕事の時間の喪失を表現する。ホワイト家具社の閉鎖で、自分たちは死んだも同然だと感じたのだ。

毎朝仕事に出かけて、夜家に戻る日課を考えてみよう。これは私たちの習慣では、ほとんど考えることなく行われている時間と空間の中の移動である。しかし、このあっちに行ったりこっちに来たりを儀式が取り巻いている。それぞれの日が新しい一日である。朝には職場は前方にあり、その人の未来にある。そこに移動することは前方への移動である。仕事は多くの時間はルーチンであるが、稀なことが起こる可能性は常にある。予想できない行動をとる見知らぬ人に会うとか、外で何が起こるか予測できないということである。不確実性と驚きの潜在性は、未来の特徴であり、未来の感覚を作り上げている。一日の終わりに、労働者は家に戻る準備をする。「帰る、空間にある足跡を戻っていく、時間の中で帰っていく、馴染みのある素晴らしい我が家へ」(Tuan, 1977, p. 127)。家はそこからスタートする場所であり、一日の旅から戻る場所である (Casey, 1993)。家は、毎日よく使う自分で選びよく知っている馴染みのある物がぎっしり詰まった場所である。「家は身近な場所... ここでは毎日が、それ以前の全ての日々に重なりあっていく」(Stark, Tuan, 1977, p. 145 より引用)。「家の場所とありふれた生活は現実を感じさせる... 現実には馴染みのある日常であり、息をするように目立たないものである」(Tuan, 1977, pp. 145-146)。

Larson と Zemke (2003) の作業時間性 (occupatiotemporality) の議論は、職場と家の両方の場所という文脈における、二人組や集団での日常活動の統合と同期化の要因のレビューとまとめの中に集約されている。私たちの多くにとって、作業的境界といえる家と職場の間の境界線は、時間と空間の区切りとして描かれる。私たちは、この二つの作業場面の間に身体的、精神的、行動的な端や境界やかけ橋をおく。Nippert-Eng (1995) は自分自身の「テリトリー」について述べ、精神構造としてだけでなく、空間と時間の位置としての自分を示し、全体の自分自身の行動を明確にするものだと主張した。私たちは、この自分自身を家や職場といった関連活動を引き起こす特定の環境

との関連で位置づける。独特な「行うこと doings」だけでなく、独特な「存在の仕方 ways of being」が職場や家やその間の移行の時間的空間的境界の中で、私たちが結び付くことに伴って現れるかもしれない。職場と家の比較は、自分の側面が時空間的に作業場面を通してその中で位置づけられ、共有されるやり方を反映する。私たちが時間や場所を変える時に、職場と家を行き来する時に、私たちの作業は自己統合され、共通する自分自身をサポートしたり、自分を区別したり、自分自身の別の側面を分けていたりするかもしれない。たとえば、「公共の」時間や空間では、私たちは普通、他者からアクセス可能であり説明責任をもつ。一方「プライベートな」時間と空間ではアクセスしにくく、説明責任もない (Zerubavel, 1985)。仕事では、時間と場所との文化的歴史的関連が、家に比べて多い。私たちは、時間と空間で生じるこうした活動の境を、物理的に分けたり区別することを伝統的に考えているけれど、Nippert-Eng (1995) は、より決定的な精神的区別や移行でさえ、物理的なものに伴うことを指摘した。時間と空間、それとその間の旅は、作業の間の境界や移行に必須ではないが、むしろ考えること (thinking)、存在すること (being)、行うこと (doing) のやり方の間の「精神的なギアシフトを助ける潤滑油」となる。Zerubavel (1991) は、仕事と家の世界は移行のための精神的跳躍を必要とすると言うが、一方 Nippert-Eng は、もしそれがより統合されれば、精神的散歩のみを必要するかもしれないと言う。Dickie (1996) は、「生産する (productive)」仕事と、自分たちの家で仕事する人々の義務である「栄える (reproductive)」家族の間のなだらかな時空間的境界について報告した。しかし、私たちの区画化された現代アメリカ社会においては、私たち多くにとって頻繁な移行が必要となる。

境界域 (liminality) (Turner, 1967, 1974; Van Gennep, 1960) とは、文化的変容のことで、そこで人はある社会的地位を離れ、別の社会的地位に入る。通常は日常的に反復される移動や自分自身のことには適用されないものだが、この概念は日常の移動にもよく当てはまる。

家と職場を往復する旅は空間的で、時間的で、社会的な「構造間 interstructural」に位置づけられる。この理由から、この間の精神的移行のための完全な機会が提供される。旅は物理的に離れ戻るのであると同時に、精神的にもあるところから切り離され、再び戻り、自分自身も別の側におかれることになる (Nippert-Eng,

1995, p. 119).

25年間ロサンゼルスで通勤した私は、自分の時間を長いと考えたことはなく、境界域での経験として高速道路を狭い駐車場と呼び、自分の状態と自分自身を日々家庭人から職業人へと変え、そして戻っていた。私の時間、空間、自分自身の大きな区別と大きな統合は、負担を緩和してきたのだろうか。

文化の万華鏡の中の作業、時間、空間

作業科学者として、私は文化を興味深くみてきた。どの作業が重要で、なぜ、いつ、どこで、どのように行うかを集団の視点として主にみてきた。Bonder, Martin, Miracle (2004) は、文化的視点にダイナミックな焦点化を進め、「... 日常の個人間の交流を通して生じるシステム」(Bonder 他, 2004, p.162) とみている。このように、時間と場所は両方とも文化の表現に影響を与える。文化は学習されたもので、その価値は地域的なものである(特定の地域で特定の時間に相互作用を通して発達する)。「新しい考えを統合する、他の文化から借りる、新たな情報を同化する文化の能力は、強さであり、文化を存続させる」(p.164)。文化的集団として、私たち西洋の作業療法士は、時間、空間、作業の考えが、どのように世界で共有するかを注意深く評価していく必要がある。

Blanche と Henny-Kohler (2000) は、異なる地理的地域間で知識を共有する3つの方法を提案しており、合衆国や他の国々での作業療法の潜在的スタイルを反映するものである。最初のスタイルは、依存あるいは植民地化であり、たぶん多くの人の今日のグローバリズムの見方である。これは考えや技術のある地域に別の地域から、地域のイデオロギーや実践との適合性を評価することなく輸入していくものである。二つ目は、自立あるいは国粋主義で、輸入される考えや技術を拒絶することによって、その地域の伝統を守るものだが、自分たちの馴染んだ考えや実践以外の外からの情報の欠落を招く。三番目は、相互依存のスタイルで、国際的な交流を通して、地域や地元の研究や教育を好ましい状態にしていくものである。アメリカの作業療法と作業科学は研究と実践を発展させており、これは世界で共有されている。しかしもっとも効果的にするためには、地域の文化やイデオロギーとの関連について評価しなければならない。

「それぞれの文化は、全ての文化がもつ空間と時間が、そこで生活する実際の空間や時間の近似であり曲解であると信じている」(Mumford, 1963, p. 18)。「時間

的パターンは広大な文化的性質の網目の交差する部分にある。それが場所のパーソナリティに浸透する」

(Levine, 1997, p. 188)「私たちは、文化と名付けられたこのものに気づくようになり、その時自分の世界から出て、違いつまり、生活の通常のやり方の本質的違いや表面的な違いに直面する。何が問題なのか、何が問題でないのか、という違いである...」(Dickie, 2004, p. 170)。

1998年から2002年の間に、一年のうちの数か月から半年、私は日本で過ごした。大学院の教育プログラムを発展させるための相談や指導をした。自分の家や職場と類似のことも多かったが、違うことも多かった。日本と合衆国における「仕事」という作業カテゴリーの時間や場所の質は、文化的形態(form)と考えられた(Trice, 1993)。形態は表面的にも文化を映し出し、文化的イデオロギーの基盤も反映している。これは、家族の再会についてのDickieの考察における例である(2004, p. 172)。そこでは、形態は移民家族の文化変容として変化するが、家族を価値付ける基本的なイデオロギーは維持される。

Hall (1966, 1983) と Levine (1997) は、他の文化を調べ日本の時間と場所の見方では、場(BA)が別の重要な基本的文化的概念である間(MA)を含むと指摘した。西洋人にとって、これは2つの物の間が空間であり、2つの出来事の間隔が時間であり、その間には何もない。日本人にとっては、間(ま)のある面は橋であり時間と空間両方の架け橋となる。作業場面間の端、境界、空間として認識されるだけでなく、両者の架け橋と認識される(Hall, 1983, p. 210)。間(ま)では、机と椅子の間の空間に何もないわけではなく、「ないことが満ちている」のであり、その間に橋があるように行動する。間(ま)には、日常生活の多くの側面が反映される。会話や対話の時間的な受け答えが違っている。日本では、多くのアジアの国々がそうであるように、話す前に待つことが重要である。自分のコメントに入る前に十分に他者が言ったことを考えるという時間をもつことを示すのである。沈黙の意味は日本人によって文化的に認識される。実際何も言わずに語るという方法が、イエスという前の十分な中断であるのかもしれない。しかし、こうした中断は文化における他者に対する意味ならば、西洋人の聞き手に対してはそうではないだろう。「ほとんどの西洋人にとって、明白な活動の欠如は、何も起こっていないことを示す。」しかし日本では、「何も活動がない期間は、意味のある行動のために必要なものと理解されるのだ」

(Levine, 1997, p. 197). Iwama が指摘するように、「なっていくこと (becoming), 存在すること (being), そして行うこと (doing) が, 日本人の経験にとってはより理解可能なものかもしれない. Wilcock (1998) は「行うこと, 存在すること, なっていくこと」(p. 249) と言ったが.

アメリカ人は個人に焦点を当てているので, 子どもは自分の独自性を表現し, 自分のニーズに気を配り, ニーズを充足することを求め, そのために必要なことをする能力を使うことを学ぶ. これとは対照的に日本の子どもは, 集団で協調していくことを学び, 自分で決めて行うより, 所属することがより重要である (Iwama). 彼らが期待するのは, 人がやさしく思慮深く交流することであり, 何かを適切に依頼することではない. あなたが必要なものは集団があなたに与えるからである.

日本の職場の時間と場所は, 義務 (GIMU) という集団志向の原則を根幹とする (Benedict, 1946/1989, Kondo, 2004). これは他者への義務である. 「仮想的に全ての社会的関係は明確に示された義務について構造化されている...」(Levine, 1997, p. 179). 中心となる義務は, 自分の家 (家族) と職場 (会社) に対するものである. 幸福と安寧の最大の源は, 「日本人がうまくお返しできたと感じるプライドである...」(Levine, 1997, p. 179). 恩や借りを返すことであり (Benedict, 1946/1989), 集団に対してのものなのである. 集団に対する義務の感覚と責任は, 「しょうがない」という感覚, その状態を受け入れ, その位置に留まり, いつでも集団内での居場所を知ることと強く結び付いている (Kondo, 2004). この場所は「がまんする」こと, 集団内での下っ端あるいは初心者 の場所と時間の辛さに耐えることを含む.

Levine (1997) によれば, 日本人はとても集団志向性が高く, プライベートな時間 (家での時間やレジャーの時間) に対する要求がアメリカ人より少ない. 公共の職場である集団内により多く留まり, 仕事時間を過ごし職場での関係を強め, 一緒に食べたり飲んだりしに出かける傾向がある. その結果, 日本の労働力のモチベーションとなる和 (WA) が生まれる. 職場と社会生活の境界の曖昧さは, 仕事と仕事でない時間の性質に対する基本的態度を反映する (Levine, 1997, p. 179). 友情と類似する社会的関係は, 職場と仕事時間に発展することが期待される. 社会的な「休憩時間... は和のために必要であり, それは一般に同僚や日本社会では... 高い価値がある」(p. 180). アメリカ人が

職場での「時間の無駄」とみるかもしれないことが, 仕事の一部としてとても重要なのである. 職場に長時間いることは, 職場に対する義務なのであるが, 時間が長くなると年長者が褒美を出す. 「先憂後楽 (せんゆうこうらく)」と言って, 先に苦しむことで後に楽しくなるということわざがある. こうした信念は, 彼らのすることが集団の努力の一部であり, ストレスに対抗する原則的な緩衝剤なのかもしれない.

「地域文化に対するグローバリゼーションの衝撃を... 考えなければならない. 作業療法理論の発展は, どんな文化であるかに敏感であり, より文化的に感受性の高い実践を導きやすくする... どの地域の文化における最良の実践においても, 考へに入れるべき作業の文化的に特有な側面と同様に, 世界共通性も考えなければならない」(Kondo, 2004, p. 182). 作業についての地域特有の理論と同様に世界共通の理論, 考へ, 作業療法理論を発展していく必要がある (Clark, Sato, & Iwama, 2000; Hocking & Whiteford, 1997; Kondo, 2004).

時間と場所：今ここで

時間と空間の万華鏡の鏡とレンズは, 作業の複雑な多くの面が見える. もし私たちが今ここで (Here and Now) のレンズを通して見れば, Friedland と Boden (1994) が「今ここで」と呼んだイメージを見ることができる. 作業療法士という役割として, 作業に焦点を当てると, 何が見えるか. 私たちの新しい AOTA 会長である Carolyn Baum は, 「社会にとっての問題を見定め, 重要な論点についての声明書を作成するプロセスを創造する」ことを奨励している (LaGrossa, 2004, p. 15). 私たちは, 自分たちの信念, 前提, 作業に関連する現代のエビデンスを見ていくことによって, 適切な問題点を見定め始めている. まず問いたいのは, 「作業は健康にどのように関連するのか」ということである. Yerxa (2000) と最近の枠組みによれば, 私たちは健康を, 自分のコミュニティに参加する意味のある作業パターンを通して価値ある目標に到達することを可能にする人の資源と考えている. 個人の作業的健康と社会の作業的健康は, つながっている. 経済的衰退という問題は失業を広げる結果となり, 社会的健康問題となる. 個人に対しては, 個人的作業に影響を与え, 作業不足や作業剥奪という結果を招く. この関連性を認め, 社会にとって重要な論点を探していくと次のような問いが出てくる, 「健康的社会とは何か.」答えはこうだ. 健康的社会とは, 全ての人が意味のある作業をできる社会である (Westhorp, 1995, Wilcock, 2003). 全ての人

が作業をできる社会は、保健医療の変化を必要とするだけでなく、政治的、経済的、その他の社会的変化を必要とするだろう。変化にどのように行きつくかについての提案は新しいものではない。世界保健機関のヘルスプロモーションのためのオタワ憲章(1986)では、5つの主な行動が必要だとしている。(1)健康的公共政策作り、(2)健康を支援する環境作り、(3)地域活動の強化、(4)個人技能の開発、(5)臨床的治療を超えて健康の実現に向かうような健康関連サービスの方向転換、である。私たちが全ての人々の健康のための作業を可能化する健康的社会の発展という重要な論点に対して、自分たちの立場に立ち、問題を見定めていくために受け入れ、用いることができる理想がある。

修道女やセラピストにとって、細やかさや謙遜はふさわしいものだが、ビジネスにおいては、声を上げ、世界に対してあなた方が十分に達成できるということを知らせる方法を学ぶとよいだろう。ところがこれを誰もこれをしようとはしていない(Trump, 2004, p. 2)。このように述べている Trump さんに言いたい。作業療法士たちは準備ができています。この時この場所で、今ここで、立ち上がり、世界に私たちが何を達成するかを言うのだ。「作業療法プロモーション基金(Fund To Promote Awareness of Occupational Therapy)」を使い、私たち一人ひとりの声で、主張していくことができる。世界に向かって声を上げよう。私たちの分野である作業療法のために、私たちの学問である作業科学のために、私たちが教え、サービスを提供する人たちのために。全ての人たちが健康的な作業を通して、自分たちのコミュニティ(自分にとって意味のある場所)で、地球のどこでも(今日も明日も)、人生の一日一日において、完全に参加するために、私たちは働くのだ。誰もが、どこでも、毎日、健康的な作業に参加するために、私たちは仕事をする。

文献

- Altman, I., & Low, S. (Eds.). (1992). *Place attachment*. New York: Plenum Press. American Occupational Therapy Association. (1995). Position paper: Occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 49, 1015–1018.
- Bamberger, B., & Davidson, C. (1998). *Closing. The life and death of an American factory*. New York: Norton.
- Barker, R. (1968). *Ecological psychology*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Bergman, L. (1998). A pattern-oriented approach to studying individual development: Snapshots and processes. In R. Cairns, L. Bergman, & J. Kagan (Eds.), *Methods and models for studying the individual* (pp. 83–122). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Blanche, E., & Henny-Kohler, E. (2000). Philosophy, science and ideology: A proposed relationship for occupational science and occupational therapy. *Occupational Therapy International*, 7(2), 99–110.
- Blanche, E., & Parham, D. (2001). Praxis and organization of behavior in time and space. In S. Smith-Roley, E. Blanche, & R. Schaaf (Eds.), *Sensory integration with diverse populations* (pp. 183–200). San Antonio, TX: Psychological Corporation.
- Bonder, B., Martin, L., & Miracle, A. (2002). *Culture in clinical care*. Thorofare, NJ: Slack.
- Bonder, B., Martin, L., & Miracle, A. (2004). Culture emergent in occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 159–168.
- Carlson, M., & Clark, M. (1991). The search for useful methodologies in occupational science. *American Journal of Occupational Therapy*, 45, 235–241.
- Casey, E. (1993). *Getting back into place. Toward a renewed understanding of the place-world*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Casey, E. (1997). *The fate of place. A philosophical history*. Berkeley CA: University of California Press.
- Clark, F., Sato, T., & Iwama, M. (2000). Bankoku kyotu no sagyoteigi no kochiku ni mukete: Sagyo kagaku no shiten [Toward the construction of a universally acceptable definition of occupation: Occupational science perspective]. *Sagyo Ryoho Janaru*, 34, 9–14.
- Cottle, T., & Klineberg, S. (1974). *The present of things future. Explorations of time in human experience*. New York: Macmillan.
- Covey, S. R. (1989). *The 7 habits of highly effective people. Restoring the character ethic*. New York: Simon & Schuster.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow. The psychology of optimal experience*. New York: Harper & Row.
- Csikszentmihalyi, M., & Csikszentmihalyi, I. (Eds.). (1988). *Optimal experience. Psychological studies of flow in consciousness*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Csikszentmihalyi, M., & Larson, R. (1984). *Being*

- adolescent. Conflict and growth in the teenage years. New York: Basic Books.
- Dear, M. (1996). Time, space and the geography of everyday life of people who are homeless. In R. Zemke & F. Clark (Eds.), *Occupational science: The evolving discipline* (pp. 107–114). Philadelphia: F. A. Davis.
- Dickie, V. (2004). Culture is tricky: A commentary on culture emergent in occupation. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 169–173.
- Edelman, G. (1987). *Neural Darwinism: The theory of neuronal group selection*. New York: Basic Books.
- Edelman, G. (1989). *The remembered present: A biological theory of consciousness*. New York: Basic Books.
- Edelman, G. (1992). *Bright air, brilliant fire: On the matter of the mind*. New York: Basic Books.
- Ehrenreich, B. (2001). *Nickle and dimed. On (not) getting by in America*. New York: Henry Holt.
- Farnworth, L. (2000). Time use and leisure occupations of young offenders. *American Journal of Occupational Therapy*, 54, 315–325.
- Friedland, R., & Boden, D. (1994). *NowHere. Space, time and modernity*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Gallagher, W. (1993). *The power of place. How our surroundings shape our thoughts, emotions, and actions*. New York: HarperCollins.
- Hall, E. (1959, 1981). *The silent language*. New York: Doubleday.
- Hall, E. (1966, 1982). *The hidden dimension*. New York: Doubleday.
- Hall, E. (1983). *The dance of life. The other dimension of time*. New York: Doubleday.
- Hamilton, T. (2004). Occupations and places. In C. Christiansen & E. Townsend (Eds.), *Introduction to occupation: The art and science of living*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- Hasselkus, B. (1999). Occupational space and occupational place. *Journal of Occupational Science*, 6, 75–79.
- Henderson, A. (1996). The scope of occupational science. In R. Zemke & F. Clark (Eds.), *Occupational science: The evolving discipline* (pp. 419–424). Philadelphia: F. A. Davis.
- Hocking, C., & Whiteford, G. (1997). What are the criteria for development of occupational therapy theory? A response to Fidler's lifestyle performance model. *American Journal of Occupational Therapy*, 51, 154–157.
- Iwama, M. (2003). The issue is—Toward culturally relevant epistemologies in occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy*, 57, 582–588.
- Iwama, M. (2004). Revisiting culture in occupational therapy: A meaningful endeavor [Editorial]. *OTJR: Occupation, Participation and Health*, 24, 2–3.
- Jacobs, G. D. (2003). *The ancestral mind*. New York: Viking Penguin.
- Kondo, T. (2004). Cultural tensions in occupational therapy practice. Considerations from a Japanese vantage point. *American Journal of Occupational Therapy*, 58, 174–184.
- Krieger, M. (1996). A phenomenology of motherhood. In R. Zemke & F. Clark (Eds.), *Occupational science: The evolving discipline* (pp. 243–246). Philadelphia: F. A. Davis.
- LaGrossa, J. (2004). 2004 RA: Revamping OT credibility. *Advance for Occupational Therapy Practitioners*, 20(8), 14–16.
- Langer, E. (1989). *Mindfulness*. New York: Addison-Wesley.
- Larson, E. (2000). The orchestration of occupation: The dance of mothers. *American Journal Occupational Therapy*, 54, 269–280.
- Larson, E. (in press). The time of our lives: The experience of temporality in occupation. *Canadian Journal of Occupational Therapy*.
- Larson, E., & Zemke, R. (2004). Shaping the temporal patterns of our lives: The social coordination of occupation. *Journal of Occupational Science*, 10, 80–89.
- Levine. (1997). *A geography of time*. New York: Basic Books.
- MacLean, P. (1978). A mind of three minds: Educating the triune brain. In J. Chall & A. Mirsky (Eds.), *Education and the brain* (pp. 388–342). Chicago: University of Chicago Press.
- Merleau-Ponty, M. (1962, 2002). *Phenomenology of perception* (C. Smith, Trans.). New York: Routledge. (Original work published 1945 in French)
- Mumford, L. (1963). *Technics and civilization*. New York: Harcourt, Brace & World.

- Nippert-Eng, C. (1995). *Home and work. Negotiating boundaries through everyday life*. Chicago: University of Chicago Press.
- Ornstein, R., & Thompson, R. (1984). *The amazing brain*. Boston: Houghton Mifflin.
- Parkes, D., & Thrift, N. (1980). *Times, spaces, and places: A chronogeographic perspective*. Chichester: Wiley.
- Pentland, W., Harvey, A., Lawton, M. P., & McColl, M. (1999). *Time use research in the social sciences*. New York: Kluwer Academic.
- Pierce, D. (2001). Untangling occupation and activity. *American Journal of Occupational Therapy*, 55, 138–146.
- Primeau, L. (1996). Human daily travel: Personal choices and external constraints. In R. Zemke & F. Clark (Eds.), *Occupational science: The evolving discipline* (pp. 115–124). Philadelphia: F. A. Davis.
- Qu, W. (2003). *Quality of daily occupational experience and its relationship with adolescent tobacco smoking*. Ann Arbor, MI: UMI Dissertations Services.
- Qu, W., Zemke, R., Chu, Y., & Sun, P. (2004). *Quality of daily occupational experience and its relationship with adolescent tobacco smoking*. Paper presented at the 84th Annual American Occupational Therapy Association Conference, Minneapolis, MN.
- Rechtschaffen, S. (1996). *Timeshifting*. New York: Doubleday.
- Relph, E. (2001). The critical description of confused geographies. In P. Adams, S. Hoelscher, & K. Till (Eds.), *Textures of place: Exploring humanist geographies* (pp. 150–166). Minneapolis MN: University of Minnesota Press.
- Robinson, J., & Godbey, G. (1997). *Time for life. The surprising ways Americans use their time*. University Park, PA: Pennsylvania State University Press.
- Rowles, G. (1991). Beyond performance: Being in place as a component of occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy*, 45, 265–271.
- Rowles, G. (2003). The meaning of place as a component of self. In E. Crepeau, E. Cohn, & B. Schell (Eds.), *Willard & Spackman's occupational therapy* (10th ed., pp. 111–119). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.
- Rubenstein, R., & Parmalee, P. (1992). Attachment to place and the representation of the life course of the elderly. In I. Altman & S. Low (Eds.), *Place attachment* (pp. 139–163). New York: Plenum.
- Szalai, A. S., et al. (Eds.). (1972). *The use of time: Daily activities of urban & suburban populations in 12 countries*. New York: Moulton.
- Szalai, A. S., & Andrews, F. M. (Ed.). (1980). *The quality of life: Comparative studies*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Terkel, S. (1972). *Working*. New York: Avon Books.
- Trice, H. (1993). *Occupational subcultures in the workplace*. Ithaca, NY: ILR Press.
- Trump, D. (2004, April 15). Quote of the day. *Orange County Register, Business*, p. 2.
- Tuan, Y.-F. (1977). *Space and place: The perspective of experience*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Tuan, Y.-F. (1982). *Segmented worlds and self*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Turner, V. (1974). *The ritual process*. New York: Pelican Books.
- Van Gennep, A. (1960). *The rites of passage*. Chicago: University of Chicago Press.
- Veneziano, G. (2004). The myth of the beginning of time. *Scientific American*, 290(5), 54–65.
- Von Eye, A., Spiel, C., & Wood, P. (1996). Configural frequency analysis in applied psychological research. *Applied Psychology—An International Review*, 45, 301–352.
- Wilson, W. (1998). *When work disappears. The world of the new urban poor*. New York: Random House.
- Wilcock, A. (1998). *An occupational perspective of health*. Thorofare, NJ: Slack.
- Wilcock, A. (2003). Population interventions focused on health for all. In E. Crepeau, E. Cohn, & B. Schell (Eds.), *Willard & Spackman's occupational therapy* (pp. 30–45). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.
- World Health Organization. (1986). *Ottawa charter for health promotion*. Ottawa, Canada: Author.
- Zemke, R. (2000). *Quality of time use and adolescent smoking*. Los Angeles: Transdisciplinary Tobacco Use Research Center, University of Southern California.
- Zemke, R., & Clark, F. (1996). The dimensions of occupation. In R. Zemke & F. Clark (Eds.), *Occupational science: The evolving discipline* (pp. 89–93). Philadelphia: F. A. Davis.